

サーキット・ライダー 2003年 1月号

顕現節から

…彼（東方の博士）らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として捧げた。

マタイ 2：1－11.

毎年クリスマスには切り絵を作ってカードにし、ご挨拶させていただいていますが、この冬はクリスマス直前まで学校があり期末テスト、論文で追われていたせいで、カード作りが遅れました。インスピレーションの沸くままに、東方の博士達の絵を描きました。今まで何度か扱った題材ですが、遠い東方からひたすら救い主の誕生を信じ、輝く一つの星だけを頼りに旅をした彼らの姿、信仰が新しい年を迎えるにあたり相応しいテーマかなと思ったからです。取り分け暗い話題が多い年の幕開けに博士達の旅が語るものを読み取ってみたいと思いました。

占星術の学者とか当方の博士とか呼ばれている数人の人たちがイエスを訪問し礼拝した記事はマタイ特有の記事で、他の福音書にはありません。彼らはよく3人の博士と呼ばれますが、実際に3人だったかどうかは分からず、ただ贈り物が黄金、乳香、没薬と3つの高価な品だったところから3人という解釈が生まれました。彼らの年齢や国籍は一切不明ですが、「占星術」と「東方」という言葉から、占星術が盛だったメソポタミア文化圏（今日のイラク、イラン、アフガニスタン）か更にその先のインド辺りと考えられますが、人々の思いは発展し、中世までには3人は当時知られていた大陸、ヨーロッパ、アジア、アフリカ（まだアメリカやオーストラリア、南極などが発見される以前でした）からの代表で、更には青年、中年、老年と各世代の代表というイメージになり、カスパル、メルキオール、バルタザールという名前まで付けられました。その成否はともかく、彼らが数百キロ、或いは数千キロという旅をして異国からイエスの所に来たのは事実です。キリスト教では1月6日を顕現節と呼び、キリスト・イエスが正式に神の子、救い主として礼拝された日（羊飼いはイエスを神の子と知らないまま馬小屋を訪れた）として、特に東方教会（ギリシャ正教、ロシア正教）ではクリスマスを祝わず、その代わりにお祝いしています。

今日の数百キロ、数千キロではなく、2000年前のそれは正に大変な距離、長旅でした。当時の旅はギリシャ・ローマの文化圏は舗装している道もありましたが、それ以外では荒れた道を進んだり、時に道無き所を進んだりもしました。また昼間移動すると盗賊に狙われるのと、日中の砂漠地帯は暑いので、夜移動することが常で、正に夜空の星だけが頼りという今日では考えられない旅でした。選民でもない博士達を危険を覚悟してまで駆り立てたものは一体何だったのでしょうか。それは彼らの時代よりも更に700年も前に語られた預言者の言葉でした。旧約聖書のミカ書やイザヤ書（第一イザヤ）に記された言葉、それが彼らに救い主への信仰を抱かせ、遙か彼方へ旅をさせたのでした。ローマ帝国の侵略によってあちこちで血が流され、あちこちで謀反が起き、人心が乱れ、荒れていた時代に彼らは平和の君、救い主を求め、旅に出ました。

今年になっていきなり、北朝鮮がアメリカ帝国に対抗するかのように核爆弾の燃料となるプルトニウム開発を宣言し、国際原子力協定を無視する蛮行に出始めました。また驕るアメリカはイラクを攻める準備を着々と進め「時は満ちたり」としています。愚かな為政者によって国が滅び、貧しい国民が飢え苦しむ姿は歴史の常でしたが、21世紀にもなってそのような愚行が成されようとは夢にも思いませんでした。一体、アメリカや日本はどうしてしまったのでしょうか？国内外で不況による倒産、失業が相次いでいるのに。

91年に日本人伝道を始めて12年経ちました。10年前のサーキット・ライダーにも同じように乱れた世相、戦争、貧困の悲しみを書いていました。人間とは全く愚かな存在です。しかしそんな暗い時代だからこそ、神の啓示である星がより輝くのかもかもしれません。暗い時代に博士達は救い主の誕生を信じて旅をしました。今年は果たしてどのような年になることか…しかし例えどのような時代であってもイエスという輝く星を見失わずに一歩一歩前進し、人生の旅を続けたいものです。

吉松 純